

動けない男のいやし

ヨハネ福音書5:1-9

【新改訳2017】

- 5:1 その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。
- 5:2 エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があり、五つの回廊がついていた。
- 5:3 その中には、病人、目の見えない人、足の不自由な人、からだに麻痺のある人たちが大勢、横になっていた。
- 5:4 【本節欠如】「彼らは水の動くのを待っていた。それは、主の使いが時々この池に降りて来て水を動かすのだが、水が動かされてから最初に入った者が、どのような病気にかかっている者でもないやされたからである。」(新改訳聖書脚注による補足)
- 5:5 そこに、三十八年も病気にかかっている人がいた。
- 5:6 イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」 ("Do you want to be made well?")
- 5:7 病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」
- 5:8 イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」
- 5:9 すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。

【祈りながら考えよう】

- ベテスダの池には、どんな人たちが何のためにいましたか。
- 38年間もの間、病気にかかって横になっている人に、主イエスはなぜ「良くなりたいか」と言われたのですか。
- この「いよしの奇蹟」は何を表していますか。

【解説】

(1) ベテスダの池

《その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。

エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があり、五つの回廊がついていた。》(1-2節)

ユダヤ人の祭りがあって、主イエスはまたエルサレムに上られた。この祭りが、逾越の祭りであるのか、その他の祭りであるのかについてはよく分からない。

しかし、どの祭りの時であったとしても、主はエルサレムに行かれた。エルサレムの北東の所に羊の門という門があって、その近くにベテスダという池があった。

ベテスダの池の周囲には五つの回廊があり、大勢の人を収容できる広いスペースがあった。この五つの回廊の頭上は、太陽や雨を避けられるようになっていた。

そこには、大勢の病人たち、身体障害者たちが集まってきていた。というのは、この池の水が時々動き、その時、真っ先に池に飛び込んだ人はいやしされるといふ言い伝えがあって、それを信じて、多くの人が集まって来ていた。

このようなことが本当にあったのか、迷信にすぎなかったのかは、よく分からない。

しかし、「溺れる者わらをもつかむ」のたとえの通り、病人や身体障害者たちがここに来ていた気持ちは、分からないでもない。彼らはそこに一縷の望みをおいていた。

世の中には、病気や身体障害を苦しめている人々が少なからずいる。ベテスダの池は、そういう人々の吹きだまりのような所であった。

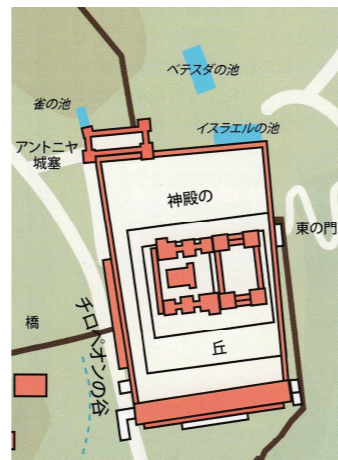
(2) 38年間、病気で悩んでいる人

その中に、38年間もの間、病気で悩んでいる人がいた。その人が主イエスの質問に対して答えているのを見ると、自分で自分の体を動かすことができないと言っているから、おそらく中風ではなかったかと思われる。

38年とは長い年月である。人生の大半をこの病気のために費やしていた。彼の青春時代も、働き盛りの壮年時代も、すべて体の不自由なことへの嘆きで終わってしまったのではないかと思われる。

その人のところへ、主イエスは来られて、こう質問された。

「良くなりたいか」



(3) なぜこのような質問をされたのか

主に対する彼の答えを見ると、主の質問は決して見当外れではないことが分かる。彼はこう答えている。

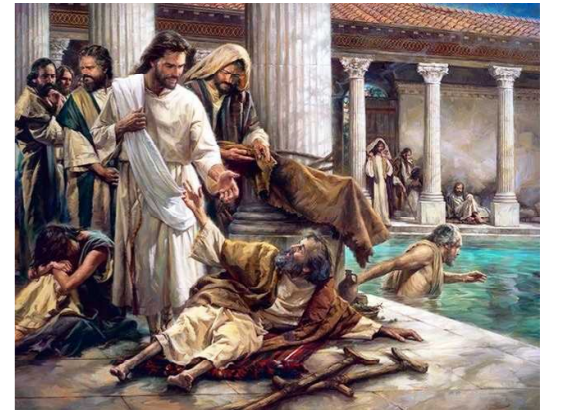
「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。

行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます」

治りたいからこそ、ベテスダの池に来ていたはずである。しかし、それまで何回この池の水が動くことがあったか分からないが、その時一番先にその池の中に入ろうとしても、足腰の確かな人が先に入ってしまい、自分が先に入ることができない。だから、半ばあきらめていたのであろう。

そこで、主はこの人に、「本気で良くなりたいたいと思っているのか」と質問されたわけである。

主から質問された時、「もちろん、そうです」とすぐ答えることができなかったのは、本気で良くなりたいたいという思いは、とっくの昔になくなってしまっていたからではないかと思われる。



(4) 常識を打ち破る質問

彼は主が癒やして下さることよりも、ベテスダの池の中に真っ先に入れるかどうかしか考えることができなくなっていた。池の中に真っ先に入ることは、半ばあきらめてもいた。自分の力では到底それが無理なことをよく知っていた。それが「彼の常識」となっていた。

人間の常識は、その人が得た知識と経験によって形作られるが、38年間ベテスダの池で横になっていた人も、「彼の常識」なるものを持っていた。その常識の枠はいつまで経っても広がることがない。

主イエスは、彼が常識の中で留まっていることを感じられて、その「常識を打ち破るための質問」をなされた。それが、「良くなりたいか」である。

主は、私たちにも同様に、常識の枠の中に安住して、進歩も何もない惰性の生活に留まることがないように、質問をしてこられる。その質問は、時として意地悪な質問のように聞こえるかもしれない。しかし、そうではない。私たちが惰性の生活から目覚めさせ、「生きがいのある生活」に入れて下さるためである。

自分の知識と経験から判断して、それは自分にはできないと考える人がいる。祈りにおいてさえ、そうしている。神に対してある制約を付け、いくら神様でもこれは無理ではないかと思えば、祈らないことにしている。

神は全能のお方であるから、不可能はない。それなのに、その場合、その人の信仰が常識という枠をはめられてしまっていて小さいために、神をちっぽけなお方にしている。本当に自分自身の今の生活を変えられたいのか、本気でそう思っているのか、そのことが問題なのである。

(5) すぐに治って歩き出した

《イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」すると、すぐにその人は治って、

床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった》(8-9節)

救い主が何かをせよと命じられる時には、必ず「それを行う力」も与えられる。主が語られた時に、この男の肉体に「新しいいのちの力」が流れ込んでいった。彼はたちどころにいやしされた。

そして、すぐに主のことに従い、自分の床を取り上げ、歩いた。38年にわたる病の後でこのようなことを自分が経験するようになるとは、どれほど驚くべきことだったことだろうか。

この奇蹟は週の7日目の「安息日」、つまり、今の暦で言うと土曜日に起きた。ユダヤ民族は、どんな仕事であれ、安息日に働くことを禁じられていた。この男はユダヤ人であった。しかし、主イエスが命じられたので、安息日に関するユダヤの慣習にもかかわらず、ためらわずに自分の床を取り上げて運んだ。

(6) このしるしが意味していることは何か

このベテスダの池で癒やされた人の奇蹟は何を表している「しるし」なのか。彼は、「ベテスダの池の水の中に、真っ先に入れば癒やされる」といふ言い伝えに固執していた。しかし、彼が癒やされたのは、水によってではなく、主イエス・キリストによってである。水は何を象徴しているのか。

それは、旧約聖書の御言葉であることが次の御言葉から分かる。この出来事に関連して、主イエスが次のように語っておられることは、この奇蹟の中心的な意味を示している御言葉である。

《あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると信じて、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証しているものです。

それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません》(ヨハネ5:39-40)

聖書は確かに基礎である。しかし、聖書を研究しているだけでは永遠のいのちを得ることはできない。永遠のいのちは、聖書が証しているイエス・キリストが与えてくださる。

キリストこそいのちの賜与者である。生きがいのある人生を送るために、いのちの主であられるキリストは、まず惰性の生活から私達を目覚めさせ、私達がキリストのみもとに行き、生きがいのある人生を送ることができるようになってくださる。